

看護職部門

看護職部門 入選

その人のためだけの 看護師さん

もりかわ みきこ
【京都府・森川美貴子】

夏の深夜、16歳の少年が救急搬送されて来た。既に心臓マッサージなどが行われ、病院到着後、即座に救命処置がなされた。その少年は、なんとか一命は取りとめたが、医師からご両親に説明された内容は残酷なものだった。誰しものが半分諦めながら、彼と関わっている。そう思っていた。そして私も…。

病室を訪問すると、ご両親は無言で涙を流しておられた。何度伺っても、何日伺っても涙は乾く事はなかった。そんなご両親の姿を目にするのは胸が痛んだが、淡々と仕事をしなければ感情を抑えることができない気がした。

「看護師さん。例えば命を取り戻すことができたとしても、次に待っている試練はね、警察に行くこと。看護師さんも知っているでしょ？この子、人一人を死なせてしまったの。バイクでひいて。このまま死んでしまう方がこの子にとって幸せなのか、それとも…。看護師さん、どっちなのかな」

初めて口を開いたお母さんの言葉に、私は、だまって手を握った。

「どんな結果が出ても試練だと思わないとね。だけど、許されるならこの子と一緒に相手様に償いたい…」お母さんが痛々しかった。

その日、お母さんに「体を一緒に拭きませんか」と声を掛けてみた。お母さんは、体を拭きながら、目からあふれんばかりの涙を流していた。翌日も、その翌日も、口の中のケア、爪切り、着替え、ほとんどのケアをお母さんとともに行った。

急性期を越えた彼は転院となった。ストレッチャーの後ろには警察官2人とご両親が付き添っていた。

「看護師さん。看護師さんは他人だから本音を話せたの。私が口にした言葉は許されることではないものね。うれしかった。私たちの部屋に来てくれる時、看護師さんは私たちのためだけの看護師さんだったから」

何十人もの患者さんと関わる毎日。忘れたくないエピソード…。